

聖書：ヤコブ 4：11～17

説教題：主のみこころなら

日時：2017年11月12日（朝拝）

この手紙の3章から「舌」の問題、あるいは「言葉」の問題が語られて来ましたが、今日の4章11～12節はそのまとめの部分となります。この手紙の読者たちは、11節から分かりますように、互いに悪口を言い合っていたようです。また自分の兄弟をさばいていたようです。互いに足りない点を指摘し、揚げ足を取り、お互いをこき下ろすようなことをしていました。そうして自分が少しでも高い地位や評判を得、知恵ある者と認められ、重要な人間として生き残ることを狙っていました。これまでも繰り返し述べて来ましたが、この手紙の読者たちは迫害によってそれまで住んでいた地域から散らされ、新しい土地で生活が大変な状態にありました。そんな中、ともすると彼らは金持ちたちにおもねり、この世で栄えている人のあり方にならう生き方をしていました。また互いのポジションを巡って妬んだり、党派を作って争ったり、戦ったりしていました。その主な手段が言葉だったのでしょう。その問題が今日の11～12節では律法との関係で論じられています。

ヤコブはここで、そのようにする人は「律法の悪口を言い、律法をさばいているのです」と言います。ここで考えられているのは特に隣人愛の戒めでしょう。2章8節にも「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という戒めが引用されました。自分の兄弟の悪口を言い、さばく人は、この隣人愛の戒めを無視している。それによって律法は守る価値のないものであり、意味のないものだと言っているわけです。本来律法は私たちの生活の規範であり、私たちは律法の下にある者たちですが、律法を守らない時、私たちは律法の上に自分を置いて律法をさばいているのです。当時のユダヤ人クリスチャンたちは、まさか自分たちが律法をさばいているとは思ってもみなかったでしょう。律法は神聖なものであり、ユダヤ人として最も重んずべき教えです。しかしもし兄弟たちに悪口を語っているなら、律法を無視し、見下していることとなります。同じように今日の私たちも聖書の律法はこう命じてはいるが、・・・と言いつつ、これを聞き流して真剣に行わないなら、律法の悪口を言い、自分を律法の上に置いていることとなります。

さらに12節には、律法に対するそのような態度は、これを与えた神に対してそのよ

うな態度を取っていることを意味すると述べられます。律法を定め、さばきを行う方はただ一人、神ご自身です。その神は救うことも滅ぼすこともできるお方です。そのお方の律法を軽んじて、私たちが隣人をさばいているとしたら、それは何を意味するのでしょうか。それは私たちが真のさばき主である神を裁判官の席から追い出し、自分が裁判官になるということです。神ご自身を退け、自分がその上にまでのし上がろうとすることです。ここにあるエッセンスは一言で言えば高ぶりでしょう。律法を無視し、これを与えた神をも無視し、自分を神より高く置いている。このように高ぶる人はやがて神の前から退けられることとなります(6節)。ですから私たちにとって大切なのは、その反対のへりくだりでしょう。神の前で自分はどのような者なのか、そのことをわきまえて、神の律法に聞き、これに従う歩みを祈り求めて行く。そのようにへりくだる人こそを神は高くされるとヤコブは言っているのです。兄弟の悪口を言って、自分を神より高い位置に置く人には祝福はないのです。

さて4章13節からは富の問題へとテーマが移ります。これまでの舌の問題、口の問題から富の問題に移ります。しかしこの二つの問題の根底にあるものは同じです。舌の問題の根っこにあったのは「高ぶり」という問題でしたが、富の問題の根っこにあるのも同じく「高ぶり」という問題です。まず13節：「聞きなさい。『きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう』と言う人たち。」どこかに出かけて、そこに滞在し、商売をしてもうけよう！と考える人たちですから、これは比較的裕福なクリスチャンであることは明らかです。彼らは今持っている富をさらに増やすための計画を立て、実行しようとしています。もちろんヤコブはこのような商業活動それ自体を批判しているわけではありません。聖書にはアクラとプリスキラ夫妻のような天幕商人も出て来ますし、また紫布の女商人ルデヤも出て来ます。そうではなく、13節のように言う人たちの間に往々にしてみられる考え方を問題にしています。まずヤコブは14節で「あなたがたには、あすのことはわからないのです」と言います。確かにそうです。明日のことどころか、数時間先、数分先のことさえも分かりません。にもかかわらず、私たちは先の計画を立てる時、「こうなって、次にはこうなって」といつまでも今の自分の状態が続くかのように考えています。ヤコブは「あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか」と問います。そして言います。「あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。」朝、地面全体の上を覆っていた霧は、太陽が昇るといつの間にか消えてなくなっています。そんなはかないものでしかない。いつ病気にかかり、いつ事故に遭い、いつ寿命が来て、終わりに

なるか分からない。そのことを忘れて色々な計画を立てている。思い起こすのはルカの福音書 12 章の愚かな金持ちのたとえでしょう。彼はある年、豊作になって、嬉しい悲鳴を上げます。そして心の中でこう言います。「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。」そして言います。「そうだ。あの倉を取り壊して、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなしまっておこう。」そして自分のたましいに向かってこう語りかけました。「さあ私のたましいよ。これからは先何年分もいっぱい物がためられた。これからは安心して、食べて、飲んで、楽しめ！」ところが神が現れて彼にこう言いました。「愚か者。おまえのたましいは今夜お前から取り去られる。そうしたらおまえの用意したものは一体だれのものになるのか」と。これからの豊かな生活を思い描いていた彼にとってまさかの展開です。彼はまさに霧のように消え去って行きます。1 章 11 節でもこう言われていました。「太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、花は落ち、美しい姿は滅びます。同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです。」このことを思う時、私たちに必要なことは何でしょうか。それはへりくだりでしょう。自分にはかない霧のような存在である。そのことを忘れて高ぶっていると、突然終わりの日がやって来るのです。しかしへり下っている人は、それと違う生き方ができるはずで

その私たちのあるべき態度が 15 節に示されています。「むしろ、あなたがたはこう言うべきです。『主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。』」 「主のみこころなら」という言葉は、私たちの人生に主権を持ちたもうお方は主なる神であると告白するものです。その人は主の御心だけなることをわきまえています。そのことを思ってへりくだり、主の主権の下で自分の人生を考えています。しかしこれは間違っ

て理解されやすい言葉でもあるように思います。時々これをおまじないの言葉のように安っぽく使う人がいます。とにかくその人は自分のやりたいことをしようとしています。自分のしたいことをしようとしています。その際に「主のみこころなら」と簡単につけるのです。「主のみこころならそうなるでしょうし、そうでなければそうならないでしょう」と。一見信仰的です。主の摂理への信仰が言い表されているようです。しかし、その人の問題は、今、主に従っているという服従の生活を抜きにして、まるでくじでも引くかのようにして「主のみこころ、云々」としゃべっていることです。神はどうされるか見てみようと、まるで神を試すような態度でいることです。そういうことがここで言われているのではありません。「主のみこころ、云々」と語る人は、その時点ですでに主のみこころを求めて熱心に従う生活をしている人でな

ればなりません。基本的な主のみこころは聖書にはっきり示されています。ですから主のみこころに従うことを求める人とは、聖書に書き表されている原則に従う人であり、それによって自分の生活を律する人です。たとえばここではお金をどのように用いるかがテーマとなっています。富について、財産について、どう考えるべきか。聖書には基本的な原則が示されています。それは神からの賜物である。みこころにかなって用いるために、この世において一時的に管理を委ねられているものである。従って私たちはこれを自分のものと考えたよりは、他人のものを私はお預かりしていると考え、真の所有者である神に喜ばれるように用いることを祈りながら考え、賢く用いるようにとされています。このことはその人が立てる計画のすべてに影響を与えるでしょう。果たしてそれをするための究極的な目標また目的は何か。そこで得たものは何に使うのか。その計画を実行するための方法また手段は何か。果たしてそれらは聖書の倫理的な要求、道徳的基準からはみだしていないか。こういった聖書に明らかに示されている主のみこころを良く熟考し、それに従うことを抜きにして、ただ財産を増やしたい、沢山持ちたい、そしてあれもしたい、これもしたい。主のみこころならそうなるでしょう、などと語るのとは全く違うということです。

別な言い方をすれば、これがテストになると思います。私たちは色々な計画を心に持ちますが、果たして今、主が再臨しても大丈夫か。あるいは自分のいのちが今、取られても大丈夫か。たとえにおける金持ち農夫は、神が現れた時、慌てたでしょう。今夜お前のいのちは取り去られると言われた時、神に向き合うための準備を何もしていない自分に直面しました。ですから大切なテストは、今日、自分のいのちが終わりになっても良いように、今日主に従う歩みをしているかということです。その上で「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、またはあのことをしよう」と願い、主のために歩むことは良いことです。その人はたとえ、その計画の途中でいのちを取られても何の問題もありません。しかしこの手紙の読者たちは 16 節にある通り、高ぶっていたようです。私はたくさん持っている。それらを所有するほど私はよくやって来た。これからの生活も、これらの富を通して私の思う通りにやっていけるだろうと思っている。これは真の主権者なるお方の前での度を越えた高ぶりと言わざるを得ないでしょう。神の前で神を押しつけて高ぶっているという点で、先に見た 11~12 節と同じです。自分が究極者であるかのように振る舞っている。そのような高ぶりはすべて悪いことです、とヤコブは言います。その人は 6 節にあったように、神から退けられるという報いをやがて受けることに至ります。

最後の17節でヤコブはこう言います。「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。」これは二通りに解釈されます。一つはこの手紙の読者たちはなすべき正しいことを知っていたと見る見方です。彼らは主の前にへりくだり、主のみこころを求めるなら、自分たちの富をどう使うことが御心なのか、うすうす分かっていました。すなわち他の人に分け与えること、御国のために投資すること、神こそ真の所有者であることを認めて、その管理人としての活用を考えるべきであること。しかしそう示されるのを恐れて、神に聞かず、祈らず、それに従おうとしなかった。そんな彼らに、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です、と言ったということです。してはならないことを積極的にするだけでなく、すべきことを消極的にしないことも同様に罪なのであると。

もう一つの理解は、「彼らは今やヤコブを通してなすべき正しいことを知った。それを知った者として、今後それを行う者でなくてはならない」と彼らを実践に向けて奨励するための言葉だと見ることです。これまでのことはともかく、今や大切な原則を彼らは知りました。ですからそれを知った以上、それを行わなければ罪になりますよ！ということです。するとある人は、それなら知らない方が良かったと言うかもしれません。聖書も色々知ると大変なことになる！と。ある意味でその通りです。何かを知るなら、その義務も発生します。しかしだからと言って正しいことを知らずに誤った道を進む方が良いということはないはずでしょう。間違った道を進んで、やがて愚かな金持ちのように、「愚か者！」と言われるのは悲惨です。正しいことを知ることはやはり祝福です。そして私たちはただ学ぶだけでなく、それを実践できるように祈りつつ取り組むことが大切ですし、ヤコブは先に「行いによって祝福される」と言いましたから、その道を行くことこそを願い求めるべきでしょう。

私たちは果たして主の前にどうでしょうか。へりくだっているでしょうか。それとも高ぶっているでしょうか。今日改めて学んだことは、私たちは明日のことも分からない者たちだということです。しばらくの間現れて、やがて消えて行く霧のような者たちである。いつ地上の人生が終わるか分かりません。ですからまずはお金をしっかり稼ぎ、それから神に従うというのでは遅過ぎることになります。事業をまずは成功させて、その後で神に従う生活を考えるというのでは間に合いません。大切なことは今日、主に従っているということです。今日、自分のいのちが取られても良い生活をするということです。

そしてそのような主の前でのへりくだりの生活とセットで、将来のこと、富に関する  
こと、その他すべてのことを考え、取り組んで行くということです。改めて今日の箇所か  
ら確認する素晴らしい真理は、この世界の主権者は主なる神であることです。主がすべ  
てのことに主権を持っています。この世界にハプニングはありません。ですから大切な  
問いは、私たちはこの主権を持ちたもうお方に対してどのように生きるかということ  
です。神は私たちを救ってくださり、私たちをなおこの地上に生かしてくださっています。  
そして地上における召しを遂行するために必要な賜物も授けてくださっています。それ  
らを用いて主のためにどのように生きるのか。「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、  
何をするにもただ神の栄光を現すためにしなさい」と言われている私たちです。富に惑  
わされ、世の考え方に惑わされ、神に従うことを第二、第三、第四と後ろの方へ押しや  
って、あの愚かな金持ちのようになることがないように。今日生かされていることを感  
謝し、今日与えられているものをもって主に仕えることとセットで、「主の御心ならこ  
のことを、または、あのことをしよう！」と祈りつつ、いつでもその時が来たら喜んで  
みもとに召される者へ、そしてその日に主から「よくやった、良いしもべだ」と言って  
迎えて頂ける主の民の幸いな歩みへ進みたいと思います。